
見習い魔術師の 100 の呪文

ユキカゴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見習い魔術師の100の呪文

【NZコード】

N2137W

【作者名】

ユキカゴ

【あらすじ】

神風特攻隊に任命され、死を覚悟した主人公…。

しかし、敵への衝突寸前に気を失つて…。

現代武器と古代魔術といろんなものが混ざった世界に迷い込んだ！？

第一章 プロローグ（前書き）

この物語は、フィクションです。
実際の人物等とは、一切関係ありません。
これ、鉄板だよね？

第一章 プロローグ

それは、突然のことだった。

ある日、俺は緑の迷彩服に、身を包んだ上官にこういわれた。

「お前には、この作戦に参加してほしい」

「了解しました」

それが、俺の死へのチケット…神風特攻隊となり、先陣を切つて、敵軍の船へと突撃を図る。

その爆撃で、一機を一機で破壊できた我々の軍は、その神風の仕事というのは、とても栄誉あること。

そう、兵士たちは思い、前日にことを済ませて、我先にと死を顧みず、突撃する。

それが…定めであった。

そして、俺もまた…突撃をする。

戦闘機のコックピットに乗り込み、いよいよ…終わるとき。

「敵軍、こちらに接近中…迎撃開始まで…3 - 2 - 1…突撃していく
ださい」

「…いっけええええええ…!…!…」

俺は、戦闘機を、ただ敵の戦艦へと突撃させた。

爆薬に、核…爆撃用と化したその化け物を俺は…ただ、衝突さ…

衝突寸前、俺は気を失った。

（登場人物）

主人公（名前なし）
二ホン国という国にいたが、戦死。
しかし、別世界に飛ばされる。

ノエル＝フォート
説明なし

大陸

大国リーシップ

四つの島の総称。

ガレー島 ドルグレ島 フォーミル島 ミシェール島があり、フォ
ーミル、ドルグレ ミシェール ガレーの順で大きい。

二ホン国

神風と呼ばれる、突撃部隊で、敵軍を一掃するという馬鹿げた国。

勢力拡大中

第一話 魔術師

「……」

俺は、どうしてこんな所に…。
つて、俺…なんで…あれ？あれ？…。

わつわけわかんねえ！なんか、自分の記憶探つても、何も出てこねえ！

どうこう事だよ…。

とりあえず…持ち物を確認…。
えと…携帯電話…？にしては、『ついもの…、穴が開いてるところから声を聞くのはわかる。
でも、このチャンネルってなんだ…？
まあいいや…ほかは…あ、ない…。

「持ち物は…これだ…ん？何か落ちたな

一面草原で、草しか見えないとこで、何か落ちて、草がガササつて音がなった。

それを見ると、それが…銃器であつた事がわかつた。

「わつわわー！なんで俺、こんなもん持つてんだー！くわつー！」

それを、驚いて投げ飛ばす。

すると…思つたよりも鈍い音がする。

てか、さつきみみたいな草の音じゃない。

何か…じつ、コツコツしたものに…例えるなら、石…。

でも、そのあたつた方向を見たら…自分よりも、メチャクチヤ身長のでかい色がねずみ色した石の化け物だった。

「伏せて！」

俺は、それを聞いて、体をかがめた。

すると、その上を何かずつしりしたものが乗った。
この感触…靴…？

「、イールグ、！」

「な、うがつ…ちよつ、おまつ…」

「うひ、動かないでよーあつ！あああああバランスがあああー！」

俺の上に乗った人が、何かを口にして、そして、倒れた。

というか、俺の上から落つこちた。

その時、その人の手から、妙な風が生まれて、周囲を巻き込んだ。
無論、俺とその人は吹き飛ばされた。

「うひうわああああー！」

「きやあああああー！」

そして、吹き飛ばされた所に、先ほど投げた銃器があつた。

「ぐわつーぐらええええええーーー！」

バーンッ！と、大きな音と火薬のにおいを放つて、そいつは、銃弾を飛ばした。

その銃弾は、石の化け物に当たるが、バキンッ！という音がなり、弾かれてしまう。

「そんなんじや、『ゴーレムは倒せないわ！』イールグ、！」

俺の横で、彼女は起き上がり、銃弾が弾かれている様を見て、『ゴーレムの方向に、左手を構えて…人差し指を向ける。

そして、何か を唱えて、風を生み、放つ。

それは、渦を巻いて、まるで、槍のよつに伸びて、一直線にゴーレムを貫く。

それが当たった瞬間、ゴーレムは粉々になつた。

「すつ…すげえ…」

「ふう、大丈夫？君、名前は？」

その人は…いや、彼女は、そう問い合わせてきた。
俺は…と言いかけたが、口を閉じた。

「ん？どうしたの？」

え、あ、う…どうして…だ？

口から…出てきやうで、出てこない…。

自分が放ってきたはずの…あの発音が…あの言葉が…出てこない…！？

「な…・・・名前…俺の…ひつあ…名前が、俺の名前が思い出せ…
思い出せない…？」

「ひつて…？わざわまで…いや…わざわの時點で忘れてたのかも…。
そうであっても…」されは…こんな…つづぐ…。

「記憶喪失……そう、君……家に来ない？」

「え……？」

「フフ、どうして……？って顔してるね」

彼女は、笑みを溢して、そうこう。

まっすぐに俺にそういう。

それにしても……とても……可愛らしい女性だった……。

顔は少し子供っぽくて、前髪をピンでとめて、顔の半分に髪がかかって、もう半分はその髪を払っている。

その払っている髪にはカエルの髪飾りがつけられ、髪の色は、黄色。服は、カッターシャツに、黒いスカート。長いソックスに、茶色の革靴。

そして、緑の瞳……。

俺は、彼女のその姿に惹かれた。

太陽の燐々とした草原に、二人。

俺と彼女がポツンといて、名前をなくして絶望する俺に彼女は手を伸ばして……

「私はノエル、ノエル＝フォート……魔術師よ、宜しくね」

「あ……魔術師……？」

「そ、まあ詳しい話は家でしましょうか」

俺は、差し出された手を掴んで、身を起こして、彼女の家へと向かった。

無限に広がる草原は、揺ら揺らと……風に揺れていた。

第一話 魔術師（後書き）

登場人物追加

new ノエル＝フォート

魔術師。主人公（名前なし）を助け、彼を家へと招く。

第一話 口シル

「お嬢が戻られる…か」

「フフ、うれしそうね？」

「どうか？」

豪華なシャンテリアに、金の椅子……。

井の上、豪邸の外の壁一面は、分厚い木の板張で囲まれてゐる。

しかし、これは一体どうなんだ……？」

「……それが、強いつらうならぬ？」

「そんな事わかつてゐよ！」

一面に広がっている草原

かつて自分が記憶のある時にここにいたのか…？そんな疑問を自分にぶつけていた。

「…ヒルヒド、やつれの風…あれ、ヒルヒドたんだ?」

「え？ああ……、イールグ、ね

彼女が、言葉と言葉の間に何かを発すると、風が手から田に見える
ぐらいに激しく螺旋を描いた。

「それ、どうやるの？」

「これは、呪文よ^{スペル}」

「呪文？なんだ、それ」

俺は、彼女にまとうている風をみつつ、彼女に質問をした。
回答としては、呪文は魔術師の根本にして、魔力源であり、それが
魔術師の証明でもある。

とか、なんとか…俺には難しくてよくわからなかつた。

「あ、ねえ君…私の弟子にならない？」

「で、弟子？俺が？魔術師の？」

「そう、別にいいでしょ？」

「…」

彼女の田は、キラキラと輝き、若干俺よりも背の低い彼女は、上田
で俺を見る。

それに耐えきれず、俺は田をそらすが、すぐに彼女はそれを追つた。

「とりあえず、これから君は、魔術師の弟子…見習い魔術師として

生れてこへりヒカルケツトー！」

にして、俺は…見習い魔術師となつた。

「とりあえず、聞きたいことがあるが…」

「なんだ？」

「俺をじいじいって呼んだ？」

そこには、二人の男がいた。

軍事服を着た男 こうりんが

そうじつ…後輪下と掲げられた旗。

旗揚げは、これを上げるのだ。

「……………」

1

「ククク…」

迷彩服を着た男は、不気味笑いを溢した。.

「たつだいまあ～！」

そこは、一階建ての家。

広い草原にちよこんとある家。
まるで、砂漠の中のオアシスかのよひである。

「まつたく……なんて所に家建ててんだ…」

「おかえりなさい、ノエル……あら、その子は？」

「帰ったか、ノエル！」

扉を開けるとそこには、グルグルメガネをかけ、オカツパ頭の女性
とボサボサ頭のスーツの男がいた。

「紹介しよう、この子は……えと……うん、ロシルー！」

「おこ、ちゅ～」

「よのじゅ～ロシルくん」

「…お嬢、じゅ～…」

俺は、色々と混乱していた。

第三話 呪文

勝手に命名された名前…ロシル、ロシル＝フォート…。

なんでも、英雄の名前らしい。

つて、なんか俺勇者フラグ立つてないか？

「俺は、ソイル＝ネードだ、んでもちは本屋ノブ子

「…とりあえず、ロシルでいい、ノエル…それで、魔術師ってのは…何するんだ？」

俺は、そこが疑問だつた。
特に注目するべき点。

「お嬢、もしかして…」

「フフ、そによ彼は見習い…。ロシル、あなたがその魔術師を疑問
に思ひのも無理はないわ…」

いや、無理ないつてか、ほほ無理やりだつたわけだが…。

「とりあえず、あなたは今後からここに来る」と

「なんでだ」

「魔術師は、危ないのよ

「魔術師といつのば、この世にあるといつてものの呪文を、全て得
たものをこうの、まず第一に、魔術師は、誰にでもなれる」
スペル

「誰にでも？」

「ええ、私がなれることもないわ」

と、本屋さんが言つ。

グルグルメガネが目立つ。

「魔術師は、基礎である呪文を意のままに操る事ができるために、呪文を言葉にできないとダメなの」

「といひとへりつきの奴か、ノエル」

「ええ、まあ……あれは手の平で作り上げた風を方向を示して突風にする呪文ね、あれは言葉として成り立たない」

「言葉として成り立たない……？」

「ええ、そうよ」

これから、少し話が長く続いたので、要約する。
魔術師は、呪文、というものを、自分に取り入れる事で、一つの呪文を扱うことができる。

そして、それらは、また100個あり、それらすべてを集めた者を魔術師とすることが、国家で決められている。
らしい。

まあ、それはそれでいいとして、世界の構成についても、詳しく聞いた。

それについては、地図を見せられて説明された。
：知つてゐるはずの島はない。

四つの島がその地図にはあつた。

そして、それら四つの島の一一番田ぐらいに大きな島をノエルは指をさして

これが、私たちのいる、フォーミル島よ
といった。

…なるほど、これが…。

F・M・i s l a n dと書かれたその島。
それから…魔術回路についても教えられた。
魔術回路とは、呪文を使う回数。

それがなくなると…死ぬ。

「なるほどなあ、大体わかつた」

「あ、それとお水を頂戴、ノブ子」

「ええ、はいロシルくん」

と言つて、ノエルは、玉座に座り、俺はそこいら辺のイスに座り、手渡されたグラスを受け取る。

ノエルもまた同じようなグラスを渡される。

「"j"くつ "j"くつ … ふはつ … フフ、それで…ロシル、魔術師の弟子になる気はある?」

「"j"くつ … ふう、またその話か…もう、あれだけ話されたんだ、それは呑むよ」

互いに向き合い、そして俺はそれを了承した。
無論、断つてもよかつた。

だが、もう空氣の流れが、俺に同意を求めていたのだ。

まあ、別によかった。

部屋を見渡す。

銃の整理をしているソイル。

ノエルから飲み干したから、もう一杯と言われ、はいはいと言つて
そのグラスを受け取る本屋さん。

そして、天井につるされたシャンデリアが、キラキラとして綺麗だ。
だが、明かりはそれだけしかなく、周りを見ると、端は少し薄暗い。
…でも、どうしてだろうか、この光から、少し…不穏な物を感じた。

「わづ、じゃあ右手を出して」

「いり…か？」

俺は、頬に片手を置いてバランスを取る彼女に、右を差しだした。

「わづわづ、じゃあ、やるね」

そういうて、彼女は、頬をついてた方とは別の手を俺の右手のすぐ
上に出して、文字通りパーで、俺の手に重ねた。
すると、急に火でもついたかのように、俺は焼けるほど痛みとい
うよりも、刺激に近い物を感じた。

「あつっ」

「だめ、手を離したら、魔術回路が壊れちゃう」

「な、何をしている…んだ?」

俺は、熱さに耐えつつ、彼女の柔らかい肌の感触を味わう事もなく、
そう尋ねた。

すると、彼女は、こう答えた。

「魔術回路を、開くの」

それが…こんな…。手のひらから感じていた熱が、やがて体に蔓延してきていた。

俺は、段々とその熱さに耐えつつあった。どうやら、少し慣れてきたらしい。

「…おし、そろそろいいかな」

「もう、大丈夫…なのか？」

「ええ、手を離して…そして、こう呟えて、ノス」と

…ノス

第四話 ノス

「ノス、…と唱えた。

いいや、口にすることもなく、ただ、口元で声を発しようとして、それが別の言葉になつて…とか、そういう感覚だ。

声は出ている。でも、言葉としては成り立たず、人に聞こえない。いいや、聞こえていたとしても、‘ノス’は、ノスとしか聞こえていない。

けれど、発した言葉は、‘ノス’、言葉であるノスと同音であるのに、違う。

「これで、契約終了…さあ、あなたもこれで、魔術師の卵の一人」

「ま、待てよ…魔術師は誰にでもなれるんじや」

「そうよ、誰にでもなれる。だけれど、力を持たなければ、押しつぶされちゃうもの…そうねえ…例えるのなら、アリを足で潰してしまう事あるよね、あれのアリの気持ちね、痛いでしょ？苦しいでしょ？それを補うというよりも、そもそもそこに何か風圧、壁、段差があれば、もしかすると、アリは生き延びることができるかも知れない。そういう理論で、安全対策として、魔術回路っていう魔術師の元素をいつでも出していられるようにしてあげる物、それが‘ノス’。でも、一回ぽつきりだけね」

説明が長い…まあ、俺なりの解釈だが、おそらくノエルは、力負けして、死んじゃうぐらい呪文というのは、強い力を秘めているから、それを弱めてくれる魔術回路を、常に出す物として、‘ノス’という呪文があるから、それを発し、自らを守らせている…と言いたいのだろう。

少し、こんがらがつててくる話ではあるが、まあ、そこらへんは、気にしたら、負けなのかもしれない。

「なあ、俺はこれからどうす」「来たわ、ノエル……『一モソ』よ」

「へえ、結構お早い登場ねえ……あ、ロシル、ごはん炊いてて

「ちょ、おまつ……何がどうなつて……いや、待てつて……俺、ごはんな
んで、炊いたことないぞ……？」

「うつそお……！？」「本當だ」「

彼女は、ものすごく驚いていた。
まあ、俺もだが……。

「ま、まあいいわ……ノブ子！ソイル！行きなさい！…」

ノエルが、それを言い終えるのと同時に、風が窓から入ってきた。
そして、銃声と爆発音が聞こえる。
…数秒後、扉が開かれ…。

「終わったわ、ノエル」

「お嬢、かたついたぞ」

「一人、取り逃してるわよ、『ガクファ』」

と、ノエルが一人の後ろを睨んで、何かを呟えると、その向こうにいた兵士は、動きを止めて、草叢に、倒れた。…距離は、およそ50m。

その距離から、ほぼノーモーションで、一人が倒される様を見て、俺は少し震えた。

恐ろしく、そして…ここにいる者たちが、只者でないという事の確信を得たことの満足感。

それらが、混ざって、不安な震えと喜びの笑みが零れ、

「俺、魔術師になつてみるよ」

と、三人に向かつて、言つた。

第五話 反逆と混迷 前篇

「んーで、お嬢」

「何」

「襲つてきた奴らの一人に、こんなもの持つてる奴がいた」

と言つて、ソイルは折りたたまれた白い紙をノエルに手渡した。それを開いてノエルは…それをビリビリに破り捨てた。

「ちよ、おま…」

「いいの、こんなの…」

「国王からの手紙だろ? またラブレターだったのか」

「まあ、そういう事にしといてちょうどいい」

「国王からラブレター…國…王…」

「…」

「どうした、ロシル」

「い、いや…ただ、国王からの手紙って、大切じゃないのか…って

「ええ、まあ戦争に参加しろって言つ奴だからね」

「だったら、行けよ……」

「なんですよ」

彼女に、権利はあるだろ？…だが、

「国のためなら、身を捨てる、それが國民だろ？」
なんて、事を言った。

俺にとって、それはなぜか当然のよう、口癖の類のよつに感じじら
れるほど自然に発せられた言葉だった。

「國民？いいえ、私たちは、アッテベルカ反逆者よ」

「反逆者…？何言つて…だったら、こんな手紙…」

「つまりは、死ねつて言つて居るのよ、あの王様は

俺は、その死ねといつ言葉を聞いた途端、急に何か違和感のよ
うなものを感じた。

…まるで、前に聞いた言葉が、トラウマだつたように。

その時、急に地響きがした。
外だ。

大きな何かが、じゅらじゅら近づいてきていた。

「悪魔…ノブ子、ソイル、ロシル、準備しなさい」

「言わなくても、準備完了よ」

「……」
「……」

俺は、何もかもが…急速に変化を始めたこの世界が、ぼやけ始めて、
その場に倒れた。

まるで、意識が…奥底のどこかに引きつり込まれるようだった。

「ロシル…シ…シ…」

くそ…何も、聞こえやしねえ…や…。

そして、俺は目を開いた。

「どういう事！ロシルが！」

「多分、悪魔に魂吸われてんだ」

「じゃあ、神姫シンキを呼ぶわ、ノブ子魔方陣の用意！私とソイルは、あ
いつ進行を阻止！」

「了解」

どうして、ロシルが…やっぱり、魔術回路の解放には、限界があつ
たの…？

駄目よ…ダメよ、魔術回路を解放して死ぬなんて…！
魔術回路をつかえこなせないときに解放してしまつと、生氣も一緒に抜けてしまう。

ただし、それは一時的な話。

だけれど、あいつがすぐに現れたから、それでその生氣を一気に吸
われて、気を失つた…。

そう、考えよう。

いや、そうでなければ…自分を抑えきれない。

感情が爆発して、今にも悔しくて、自分を憎くて、自虐してしまいそうだから。

今は、彼らを…信じ、ロシルを助けるのが先。そう、自分に言い聞かせた。

「、イールグ、」

と、唱えると、手から強風を小さくつくりだし、周囲の風おも吸い込み始めた。

そして、圧縮。

激しい音とともに、竜巻を作りだして、それを指先をまだ姿見えぬ方向へと放つ。

「ノエル！ 2時の方向に、魔弾が来てる！」

「、シェイケエル、」

シェイケエルは、周囲の魔弾を感じて、跳ね返す呪文。

ロシルを置いて、草原へ出たノエルは、ほぼ360° 悪魔に囮まれていた。

「通りで、生氣の吸收が早いわけね、ソイル狙撃銃（スナイパーガン）で、何か見える？」

ソイルは、家の屋根から、長さ1050mm程度の全長がある。それを、軽々しく片手で構えて、スコープを覗きそして、相手を確認する。

「ノエルが、打ったイールグの方向にいる」

「距離は…ああね、まあまあじゃないかしら」

そういうて、ノエルは弓を構えるように右手の人差し指と中指を丸め、

親指でそれを抑え、そして引いていく。

すると、そこから電撃の糸のような物が、蛇のように絡み付いて、

そしてビリビリという音を激しくたてて、それは動く。

そして、左手には、黄金の弓が握られ、イルグが目指した先へ構え、放った。

「、カルティスオウネ、」

というと、放った矢は、電光石火の如く、光の速さで直進した。

第六話 反逆と混迷 後編

「復讐？まあ、それも悪くはないけれど… もう少し、数を減らせて
くれないかしら？あんまり疲れたくないの」

そういう、私は、指を天へと掲げる。

そして、「ティッシュ」、と唱えた。

すると、指先から、閃光が広範囲を包み、そして影の魔を消し去
つた。

周囲は、チリ一つ残らず、まるで何もないかのようになつた。
だが、その中で幾つかの影がノエルを襲う。

「フフ、B級魔には、ティッシュは効かないつけ?じゃあ、「イ
ールグ」」

目の前に、突如として現れた影に、突風が襲う。
彼らは、影をグニャグニヤにされて、吹き飛んだ。
形は、崩れてそして跡形もなく、消えた。
そして、最後に強敵と思われる奴が姿を現した。

「へえ、ゲーデか」

「異界の地の者を引き取りに来た」

「残念だけど、ここには異界人はいないわよ?」

黒い山高帽と燕尾服を着た男の姿がそこにはあった。
私から見ると、長身で、大よそ180cm程度はあろうか、それぐ
らいはあつた。

彼は、ゲーデ

生と死の間の仲介者なんていわれる。

そんな彼との面識というと、魔力を大幅に出した時に自分が力尽きそうになり、そこへゲーデが来て、魔力供給をする代わりに、死者を送れと言われている。

無論、ここには今死者はないから、どうにもならないわけだが。

「どうか、ではまた伺うとしよう、してノエルよ」

「なに?」

「私は、こう…ファッショソンといつものわからぬのだが、その姿は、少しどうかと思うぞ」

「なんのことかーしーらー?」

ちょっと頬を膨らまして、怒る私を見て、ゲーデは言葉を選ぼうと少し焦っている。

フフ、かわいい。

「…ほん。まあ、私はこれで失礼する。ノエル、手をこちらへ

「魔力供給ね、わかったわ」

私は、両手をパーにして、目を少し閉じる。

ゲーデは、その上に手を置く。

黒い手袋から熱気が伝わり、私の手を段々とあつくする。

「終わった、ノエル…いいか、あまり無理をするなよ」

「あなたに言われちゃうの？あら、恥ずかしいわ」

まあ、彼にはわかられちゃうんだろう・・・。

私が、彼と魔術回路でつながっているのだから。

魔術回路は、魔術師の魔力の通路。

それが繋がれるということは、魔力を共有するということ。

私とゲーデは、魔力が送受信できる。

魔力連結という。

ただし、できる人数は3人までと決まっている。

魔術回路は、共有者の命にもかかる・・・。

一人が死んだら、ほかも死滅する。

それが、魔力連結の怖い所だ。

魔術師の根本である呪文の受け渡しも、魔力連結で、できる。

私の師匠、エドワード・フォートと私は、魔力連結で、魔術師権限の受け渡しをした。

100の呪文と1の呪文。

それが、魔術師という者が持つものだ。

私は、1の呪文、「加護」が、ある。

1の呪文は、魔術師に問わず、持っている呪文。

そして、100の呪文は、魔術師の証明として、最後に自分が作る呪文。

100の呪文は、魔術師権限の受け渡しをした時、魔術師になる方の1の呪文となる。

「私、ノエル・フォートは、ここに血の契約を・・・」

「私、ゲーデ・アンデリフエン・デ・ビューカディオスは、ここに冠の契約を果たす」

「すなわち、私はゲーデ・アデュエブリフェツ・・・いいにくつ！」

「なつ、失礼な！君の名前と同じではないかっ！」

「もう… ゲーデでいいでしょ…？」

「却下だ。」

そんな時、ソイルとノブ子が近づいてきた。
ゲーデは、早くしろと言つて、契約を急かせ、その契約は成立した。
私は、このゲーデのフルネームをいつになつても覚えられない気がする…。

とりあえず、フォーミルに会つ… 必要がありそうね。

「フツ、あれが、新人魔術師君候補…」

「さて、どんな味がするんだろおなあ！」

「これ、急かしてはいけないぞ、シフォン」

「お前もよだれふけよお、エイピロ」

二人の男が、ノエルの家に住む、ロシルを見て、いや狙っていた。

第七話 魔導師

「さて、そろそろ動くぞ……」

この島の城の王、ラグナ・フォーミルは、二人の使者を用意した。彼らは、魔導の道を進む者、魔導師。そのエキスパートだ。彼らは、それぞれに持つ武器を自由自在に扱う。

オールバックの黒と白の縞々の髪型に、緑のフードコートを身にまとい、大鎌を片手で軽々と持つ男の名は、シフォン・ノイスクランチ。

黒いスーツ姿に、白髪の男の名は、エイピロ・ヤングマン。

彼らの使命は、ロシリ・フォートの監視。

そして……エイピロはその使命を得たとき、ニヤリと白い歯をむき出しにし、ほほ笑んだ。

まるで、待ち浴びたかのように……。

ラグナは、それを見て、確かにほほ笑んだ。……が、一人シフォンだけは、それをしなかつた。

「……ほう、貴君があの魔導師に。ですか、ふうむ、またもや面白い方に……フフフ」

「るっせえー行くぞ、ノエル！」

「え、ええーシフォン！」

シフォンは、しばし、空を眺めこころに至つたまでの経路の内、ノエルとの共闘を思い出していた。

城壁に囲まれた城、フォーミル城……。

そして、それをさらに囲む城下町…。

それらを見下すようにシフォンは田を細めて、こう言った。

「覚えてるか…ノエル…ここが、お前と俺の理想郷だつたんだぜ…こんな…薄汚れた大地が…！！！ああ、くそ、チクショウ…くそ、くそ、くそ！俺たちは、何のために…ノエル…くそ…・・・」

「な、なんだ？」

俺は、窓辺を見る。
妙に微動する窓。

そして…その先に…人の影。

「まさか、敵！？」

俺は、腰のベルトにつけていたハンドガンを手にする。
投げ捨てた後、ノエルが拾つてくれたのだ。
…そして、このハンドガンには、魔弾まがんという魔力を使つた弾が入つ
ているらしい。

それは、持ち主の魔力を弾に変換することで、弾丸を供給する仕組み。

『我が洗礼を受けよ、ラ・ビネスチエ』

と、俺がそれに気が付いたのは、吹き飛ばされた後だつた。
壁を鉄球が通つたようにぼっかりと開け、そいつらは現れた。

「魔導師、と…じょ…なんてな？」

大鎌を持つたオールバックの男と、黒いスース姿の男が、こちらを見下してそういった。

かという俺は、吹き飛ばされて、家の壁で吐血してぼやける視界からそいつらを見た。

……確実に、やり手だ……。

「ハイペロ、ここには任せせる、俺はやることがあるからなあ……」

「わかつた、十分に楽しんで来い、シフォン」

そういうて、シフォンと呼ばれるオールバックの男が、開けた穴からさつきノホールたちが向かつたところへと歩んでいった。

「ぐふつ……お前ら……一体……」

「フフフ、なるほど……君は知らな、なんだ……だけれども、君は知る必要はない、大人しく呪文を渡せ、それが君が生き残る唯一の手段だよ、ロシリ・フォート君」

俺が……持つ……呪文……なんて、……ないぞ……。

「さあ、早く。ああ、そういうえば手渡しはできないシステムだった……では、強制的に抜くとしようつ……」

そういうて、物凄い早さでこちらへと飛び込んでくる。

咄嗟に俺はそれを横へと転がつて避ける。

壁からは、ボロボロと壁に使われていたコンクリートが零れ落ち、かつそこには平然と壁に腕を突き刺すエイペロの姿があつた。避けなければ、……ああなつてたわけだ。

「ちよこまかと……動くな

「あ、^{あいにへく}生憎・・・俺はそんな趣味はないんでな……」

ノエルたちが戻つてくるまで…待つ…か。
いや、待てよ…さつきのシフォンってやつがあいつらの足止めをしてる可能性も…

「うひ、うわつー。」

俺は、またもや襲い掛かるハイペロの猛進からスレスレで避ける。やはり、早い。

…けれど、見切れる…。

「このスピードでこいつを逃す…いいだらへ、ではこいつだ」

次に、ハイペロは手と手を合わせて、ゆっくりと左右に伸ばしていく。

すると、そこから電撃が生まれ…。

「形勝とは、このことだらうかな、私は君から残り数歩でたゞり着き、かつ君は壁に追い込まれている、これはもはや…死を覚悟する所だらう」

電撃の中から、弓が生み出されてしまう。
それも、広げた分だけ。

「私は、このラ・ビネスチユを扱うアーチャーの魔術師…・これぐらじ明かせばわかるだらう?」

「…なるほどな、つまり俺はここから動くとやの口でやられ、動かなければ…貫かれるわけだ」

たとえ一撃をかわしても、次の攻撃では身動きは取れない。つまり、連撃が来てしまつとやられるとこつ事だ。

「やつこつ」とだ。諦めろ」

「殺してまで奪えるものなのか？これ…まあいいや…俺も俺でこいつを使ってやる」

そつこつて、ハンドガンを強く握る。

「ふむ、投影武装とちがつて、実物武装の方が有利…なぜなら、反魔力効果があつて、魔力を相殺してしまうから…だが、有限ゆえにそれは投影にある…」

弓を構えるエイピロ。

俺は、それに対しハンドガンを構える。

…そして、銃弾は銃口から跳ね、そして…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2137w/>

見習い魔術師の100の呪文

2011年10月29日15時10分発行